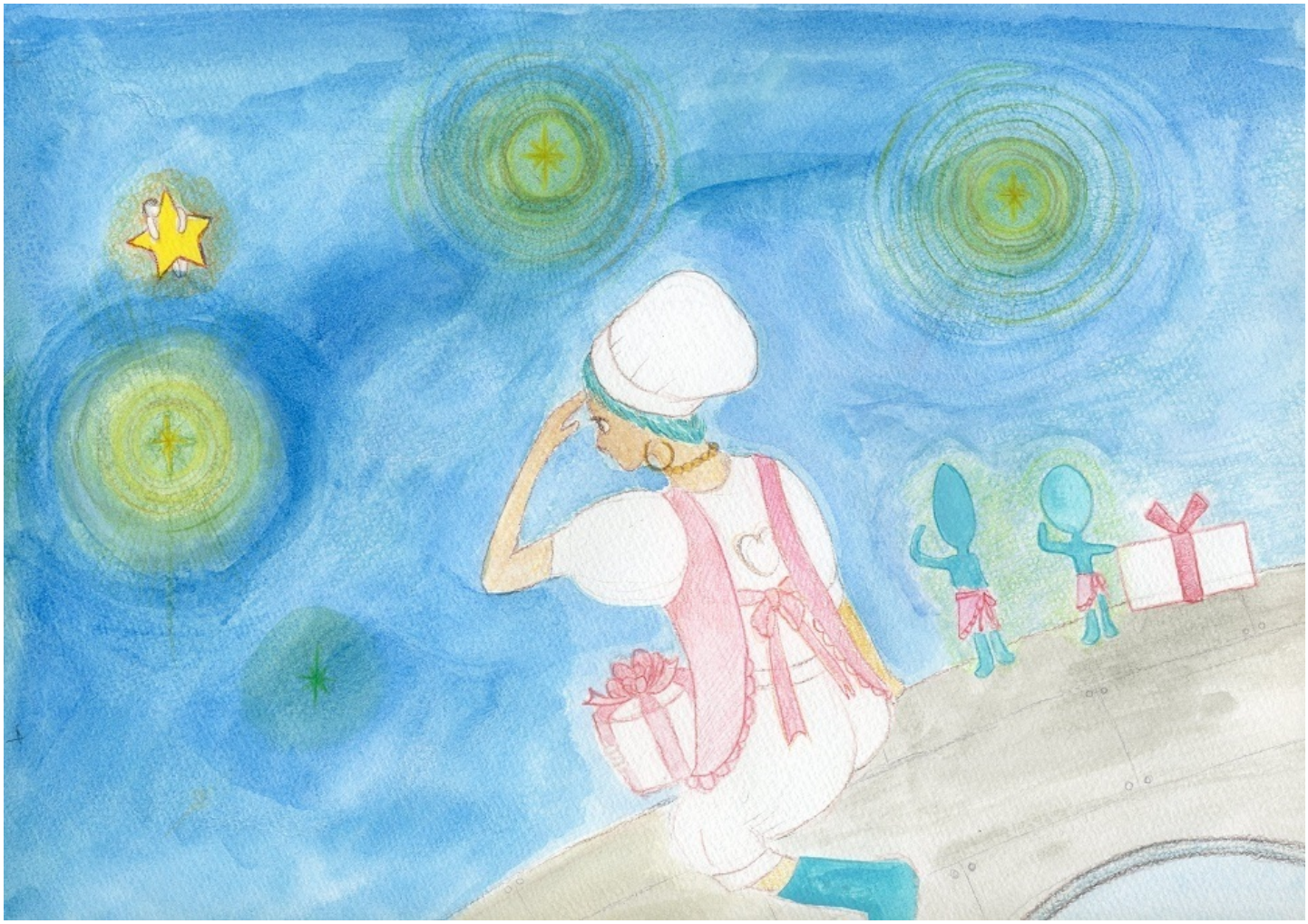
LOVE３号に乗って

yoshie＊

私は、死んだ人をお星さまにする仕事をしているの。
そのために今、ケーキを作っているのよ。

なんたって、ケーキはおいしいほうがいいもの。
仕込が大変なのよね・・・

と、宇宙人「エレン」は仲間の宇宙人にぼやいた。



今日のターゲットは・・・
いたいた、あの子。

もうすぐ、おそらの　お星さまになるのだけれど、
何か　気がかりがあるのかしら？
ずっと　地球を見ているわ。

男の子の近くにいくと、男の子は言った。「あんた誰？」
「私はエレン。宇宙人よ」
そういうと、エレンは大きな星に　彼のお母さんを映し出した。
「これが　あなたのお母さん？」
「うん、僕が死んでから　毎晩泣いているんだ・・・」

じゃ〜ん！！
そんな　あなたに、とっておきのものがあるの

あなたの　お母さんのために、作ったケーキ。
脳みそがとろけるほど　おいしいの。

エレンはケーキを差し出して言った

このお星さまのケーキは　「忘れられケーキ」
死んだ人のことを、忘れられるケーキ。

そして、こちらの　イチゴショートケーキは「思い出しケーキ」
死んだ人のことを、思い出すケーキ。

美味しそうでしょ？

ケーキを　見た男の子は、エレンに言った。

「できれば、僕のことは　もう忘れてほしい」
「お星さまの　ケーキを　食べさせてあげたい」

それは、お母さんが決めることよ。

そういうと　ふと思い出したのか、男の子は泣き出した。
そして、下っ端の宇宙人も泣いた。

「その涙、いただきっ！」

エレンが言うと、
一粒の涙が、ショートケーキに　落ちた。

「これで、イチゴショートに　魔法が　かかったわ。
これを　食べれば、あなたのことを思い出すことができる。」

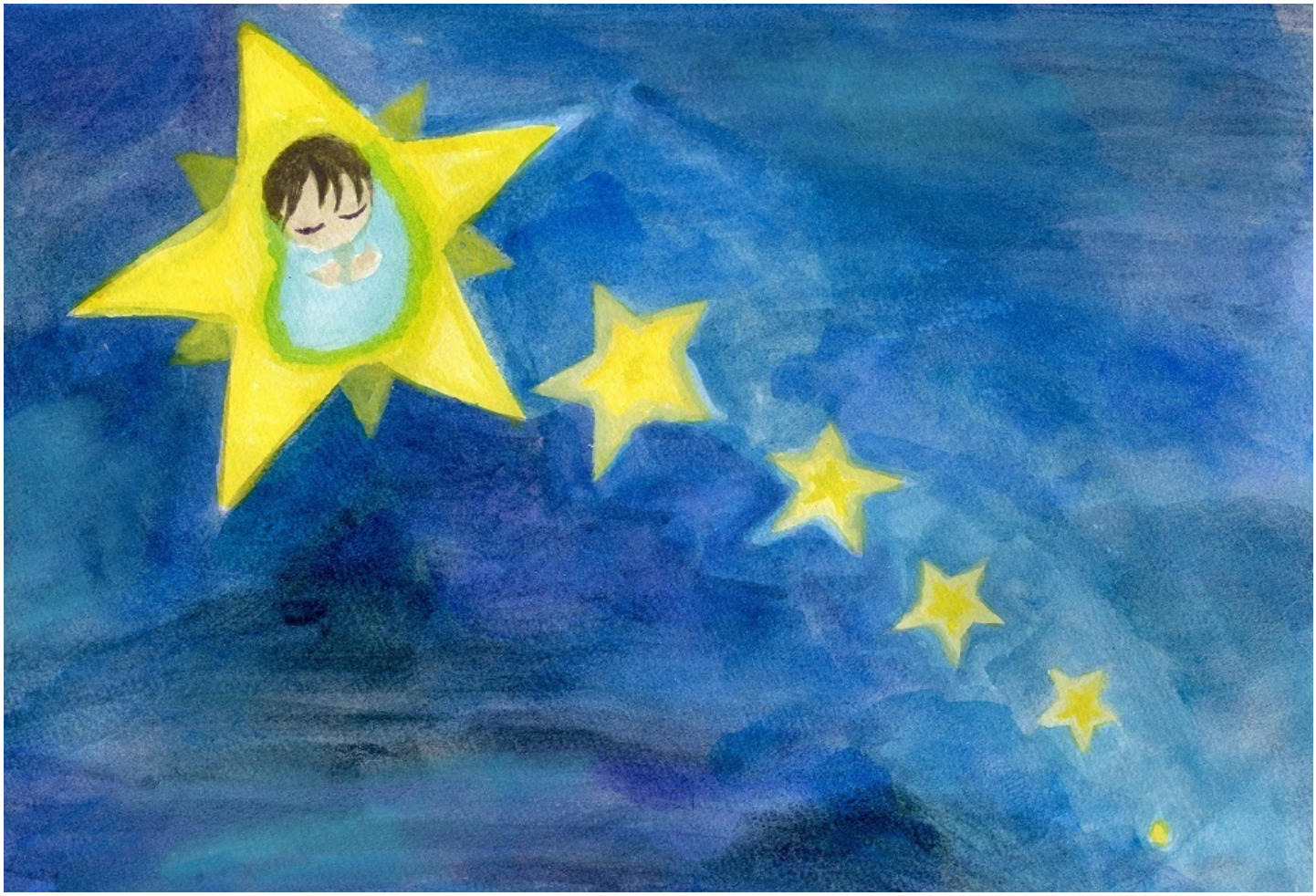
じゃ、行ってくるわね。
エレンは、地球の　お母さんの　ところに向かった。

お母さんは、夢を見ていた。
夢の中で、かわいらしい　女の子が、
美味しそうな　ケーキを　持って立っている。

どちらが　いいかしら。
さっきのことを　お母さんに　説明すると、
お母さんは、何も言わずに、ショートケーキを選んだ。
ありがとう、とっても　おいしそうだわ。

一口　食べるごとに、あの子のことを　思い出す。
お母さんは　うれしくて　しょうがなかった。
何も　食べていなかった　お母さんは、食べ終わる　頃には
すっかり　元気になっていた。

花を持った、小さい頃の　男の子が、笑顔で言った。
「これ、おかあちゃんに　あげる」
はっとして、店に行くと、3日間　何もしてなかった　花たちが
しおれて　いるのきづく。
「ごめんなさい・・・・」
おかあさんは、花たちに話しかけた。



それをみた　男の子は、安心して　言った。
「やっと、元気になってくれた」

そこには、あの頃と　同じように　微笑んでいる　彼がいた。

大丈夫、あなたは、お星さまになるから、
いつでも　お空から、お母さんを　見ることができるわ。
そういうと、男の子は　小さくなって、黄色いお星さまに　変わった。

数日後、花屋さんには、以前のように　微笑んでいる
お母さんの　姿があった。

「うまくいった　みたいだね」
仲間の　宇宙人が　言った。

「・・・LOVE３号、応答　願います。」「こちら　LOVE３、ミッション　成功！」今日も
また、LOVE３は　宇宙のどこかを　飛行中。イチゴ　ショートケーキを持って・・・

奥付

LOVE３号に乗って・・・

http://p.booklog.jp/book/35006

著者 : yoshie☆
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yoshie88/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/35006

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/35006

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.